The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大名金融史論
Author(s)	森, 泰博
Citation	大阪大学, 1971, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30486
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【1】

氏名・(本籍)	森（もり）　泰博（やすひろ）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	第　2402　号
学位授与の日付	昭和46年11月13日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**大名金融史論**
論文審査委員	(主査)教授　作道　洋太郎
	(副査)教授　原田　敏丸　　助教授　竹岡　敬温

論文内容の要旨

藩債、貸手からみて大名貸を、大名の財政難による借金一般としてではなく、幕藩制に構造的に内在する、藩財政に常例の構成要素をなす借入としてとらえ、その典型を大阪商人からの当用借であるとして、当用借の原則の貫徹如何により、成立・変質・崩壊の時期区分をおこない、各時期の大名貸の性格を明らかにする。

すなわち各藩は、領内非自給物資の購入と参勤交代・江戸在府・手伝普請など幕府への勤役のための支出を必要とするが、これにあてる全国的貨幣たる鋳貨は、年貢米その他の蔵物を売払い獲得しなければならない。年貢米収納・売払いの時期とその量によって入手しうる貨幣と、支出を要する貨幣との、時期と額について生ずるずれを埋めることが、典型的な大名貸の機能である。西国諸藩では、大阪への登せ米の換銀の時期と量にかかわりなく江戸で恒常的な貨幣支出を必要としたから、江戸仕送りという形で定期的に借入れて蔵米が売れてから返済する。登せ米のない春から秋までは財政難からでない常例の藩債が生ずる。支出増による不足が証文借として累積しても、元利払いがその後何年かの登せ米売払代でなしえておれば、当用借の派生としての証文借とみる。

このような借用借の成立は17世紀後半であって、鎖国のもと、全国的な集散市場として確立した大阪への登せ米増加、参勤交代の制度的完成と江戸の大消費都市としての台頭により、江戸から大阪への商品代送金と藩の江戸仕送りとの為替決済がなされるから、多くは両替屋であった掛屋が連続的な業務として江戸仕送りを担当した。

享保期の米価下落により大名貸は危機に直面し、以後の変質の起点となった。幕府の米価引上策としての米延売買公認と堂島米会所設立によって表面化した浜方の大名貸の拡大、浜方を含めた館入による大名貸の分担が一般化し、藩債の推移は米切手売高と実米登せ高との乖離の度合に集約的にあらわれてくる。この時期には、幕府の御用金徴収一公金貸付という金融統制と、特定藩の借入れへの直

接介入が加わり、本来的な大名貸がゆがめられる。18世紀後半以後の大名貸を、幕府権力介入の強弱により、(1)西国大藩外様大名への貸、その対極に位置する幕府権力の直接介入による御用金とは紙一重の(2)特定親藩への準御用金的大名貸、この両型の中間の(3)関東譜代大名への貸、の三つの類型に分ける。

典型的な大名貸の崩壊の時期は、幕藩制的分業関係の崩壊によって劃する。

論文の審査結果の要旨

本論文の意義は、大名貸を領国経済の財政窮乏にもとづく藩債としてとらえた従来の見解を実証的に克服し、幕藩体制に構造的に内在するものとなし、これを藩財政の経常的な構成要素をなす資金の移動として把握した点にもとめられる。さらに、本論文において、大名貸の典型を大阪商人からの当用借であるとし、当用借の原則の貫徹如何により、成立・変質・崩壊の時期区分を行ない、各時期における大名貸の特質を明らかにし、幕藩体制史の研究に新しい視座を設定した功績には画期的なものがある。

本論文は経済学博士の学位を授与するに値するものと認める。